

<解説＝野口壽一>

本書を理解するために

西側世界にとって80年代のアフガニスタンはブラックボックスである。周辺情報はいくらでもあるが内部情報は少ない。状況証拠や公式情報をベースに憶測するしかない。

80年代の10年近くアフガニスタンに直接武力介入を行い、それが崩壊の原因のひとつともなったソ連に関しては、アメリカに対抗する超大国であったこと、ソ連を引きついだロシアが依然として軍事的経済的に大国であることから、この武力介入は研究対象とされてきた。ソ連が崩壊してロシアとなり当時の内部資料が一部公開されるようになり、アフガニスタン武力介入に関わるソ連内部の動向が少しずつ明らかにされつつある⁽¹⁾。また、このような地道な研究はその後も続けられ、成果が発表されている⁽²⁾⁽³⁾。

しかし、アフガニスタン内部の事情に関していうと、80年代を通じて政治の中心となっていたアフガニスタン人民民主党(PDPA)⁽⁴⁾が完全崩壊し、その後ほとんど20年間、破壊的な内戦状態がつづき、人的にも資料的にもデータが散逸ないし消滅する厳しい事態が出現した。人民民主党政権が崩壊してからの4年間は前政権を打ち倒したムジャヒディン⁽⁵⁾同士がミサイルを含む最新兵器で内戦を繰り広げ、首都カーブルは文字通り廃墟となった。さらにまた、内戦に明け暮れるムジャヒディンを武力で放逐したタリバン政権⁽⁶⁾はイスラム回帰を旗印にカンボジアのポルポト政権に勝るとも劣らない反西欧文明政策を実施し、政治文書だけでなく文化娯楽作品まで焼き払う徹底ぶりであった。

しかもアフガニスタン社会の破壊は、2001年からのアメリカによる武力介入によりさらに拍車がかげられた。アメリカはソ連の侵攻時をはるかにしのぐ空爆を実行した。そしてその戦争はさらに10年、いまだに続き、年々激しく、かつ破壊の度を増している。このような戦争状態の継続のなかで、80年代の政権党内部の動向など、日本語によるアプローチでなくともほとんど不可能に近い状況にあった。

一方、消滅したとはいえ80年代のおよそ10年間を通して存在した体制のもとで活動したアフガニスタン人はいたし、社会的な利害関係をもって支えた人びともいた。一部の人びとは国内に残っているが大部分は難民となってアフガニスタンか

ら逃れ、国外において80年代を回顧する文章を残しつつある。

近年のインターネットの発展は国外・国内にいるアフガニスタン人をつなぎ、回顧するだけでなく、アフガニスタンの平和と人権の擁護、よりよい生活をめざして毎日、未来を見据えた活発な情報交換や交流がなされている⁽⁷⁾。アフガニスタンの現在はいまなお80年代と直結しているのである。

このような状況のなかで、日本に10年近く駐日大使として赴任し、アフガニスタンに帰国してからは副首相、副大統領として文字通り人民民主党政権の死に水をとったアブドゥル・ハミド・ムータット元駐日大使(以下、他の人も含め、すべての人の敬称略)が、折に触れて書きためてきた文章をベースに、アフガニスタン帰国後の5年間の内部事情を日本人読者のために再編成し書き下ろしたのがこのドキュメンタリーである。

物語はムータットが日本での任務を終えてアフガニスタンに帰国する1987年に始まる。彼がなぜ10年近くも日本に大使として赴任しつづけなければならなかったのか、その理由にはアフガニスタンの事情だけでなく、日本の問題も含まれている。

ムータットは特命全権大使として1978年6月に日本に着任した。その時日本とアフガニスタンは正常な国交関係にあり、ムータットは1978年7月10日、皇居において昭和天皇にアフガニスタン政府の信任状を提出し日本国のアグレマン⁽⁸⁾を受けた⁽⁹⁾。しかし着任して1年6カ月後、ソ連軍のアフガニスタン侵攻が開始され、それに対抗する形で西側世界全体はソ連に対する糾弾・制裁を始めた。ソ連の武力介入と同時にカーブルに設立されたカルマル政権⁽¹⁰⁾に対しても西側各国は大使を召還し政治・外交・経済関係の断絶を図り、その年のモスクワオリンピックをボイコットした。日本もこの反ソ連・反アフガニスタンキャンペーンに加担し、国交断絶こそしなかったがPDPA 政権が崩壊するまで大使を召還し、その間アフガニスタンには大使を置かなかった。世界をふたつに分かつ激動の中で、ムータット駐日大使とアフガニスタンは、ひとたび大使を召還した場合日本への再入国が不可能、つまり日本・アフガニスタン両国には大使の交換がない国交断絶状態に陥ってしまう状況に追い込まれた。つまり、日本が特命全権大使としての再入国を拒めば、日本にアフガニスタン大使が存在できなくなるのである。

ムータットには西側世界への数少ない正式窓口として東京の大使館を守る任務が課せられた。厳しく吹き荒れたソ連・

アフガニスタン制裁機運を少しでも和らげ、真実を伝えるため、一度も帰国することなく日本で奮闘したのである。⁽¹¹⁾

武力によるアフガニスタン政府支援が行き詰まりアフガン国内の対立が深まる過程で、1986年5月、ソ連はカルマル政権に見切りをつけナジブラ政権⁽¹²⁾を成立させた。そして従来の革命路線から国民和解路線へと舵を切ったのである。

物語の冒頭で語られるように、ソ連の武力介入後7年が過ぎて、アフガニスタンの政治におけるムータットの役割に転換が生じた。東京でアフガニスタン政府の窓口としての活動をするよりも、アフガニスタン問題解決のためにより直接的に働くよう求められたのである。つまり、ソ連軍との戦いの過程で頭角を現してきた「渓谷の獅子」と呼ばれるマスード司令官⁽¹³⁾との和解交渉である。詳細は本編で語られるが、ムータットは同郷で遠い縁戚関係にある同じタジク人としてマスードとの交渉にはうってつけであった。物語は、ナジブラ政権中枢において副首相、副大統領として国民和解に取り組むムータットの苦闘によって幕を開ける。

その風貌と性格から「荒野のブル(野牛)」と呼ばれたムハンマド・ナジブラ大統領や政権上層部の動向と心理状況を1987年から1992年の政権移行の時まで、これほど克明に描写した記録はムータットの手になるもの以外にはないのではないか。しかしこの物語の主人公のひとりとは直接登場することは非常に少ないが、パンジシール渓谷に拠点を置きソ連やアフガン政府軍と戦争しつつ、ナジブラ政権内部の隅々にまでネットワークを張り巡らせ、背後から圧力をかけ、ある時には直接指示を出して操るアーマド・シャー・マスードである。彼はムジャヒディン戦線の一翼を担う反ソ連・反政府司令官でありながらパキスタンに拠点を置くその他のムジャヒディンとは本質を異にしていた。すなわち、外国勢力の手の内で踊る反対派と連携しつつ一線を画す、アフガニスタンそのものと言うべき存在であった。マスードはソ連軍の絨毯爆撃をかくぐりパンジシールに病院や学校などの建設にもとりくみ、戦争をつづけながら国づくりを行う。

ナジブラ政権もソ連からの独立を(ソ連側から強制されたものであったとしても)果たす責務を負っていた。「荒野のブル」の戦いと「渓谷の獅子」の戦いが、圧倒的に後者の優位に転換していく様子を、ムータットは8000メートルの高空を悠然と舞い飛ぶ「ヒンズークシの鷹」の目による観察と両者の間に介在する自らの行動によって明らかにしていく。アフガニスタンからの撤退を果たそうとするソ連軍は、ナジブラ政権よりむしろマスード司令官と直接交渉する道を選ぶ。ムータット

は当時のソ連ゴルバチョフ大統領の親書をマスード司令官に手渡しに赴く。司令官は戦略的な観点からソ連軍を助け、国内で戦う政府軍司令官や兵士らに対して融和的な措置をつぎつぎと打っていく。敵との約束を誠実に履行するマスード司令官の姿勢が政府軍の中に亀裂をうみだし、政府軍とマスード軍との連合を実現し、ナジブラ大統領を追い込んでいく。

物語後半においては、パキスタンに拠点を置くムジャヒディン派との妥協に走り権力にしがみついたナジブラ大統領派に対して、マスード司令官ら国内に基盤を持つムジャヒディンへの権力移行を実現しようとするムータット副大統領ら国内派との内部闘争が描かれている。緊迫と迫真のやり取りがスピード感あふれる筆致で描かれている。本書の白眉である。

さて、このドキュメンタリーから現在に引き続くいかなる教訓を読み解くのか、ムータット元副大統領の序文と本編を熟読され、読者の皆様一人ひとりにお考えいただきたい。

<注>

- (1) 『アフガン戦争の真実』(金成浩:2002年日本放送出版協会)
- (2) 『アフガニスタン国家再建への展望』(アジア経済研究所＝企画、鈴木均＝編著、2007年、明石書店)
- (3) 『ソ連のアフガニスタン経験』(湯浅剛:2009年、防衛研究所紀要第12巻第1号)
- (4) アフガニスタン人民民主党: 1965年に結成された民族民主主義を思想的骨子とする政党。外部からは共産主義、社会主義政党と呼ばれたりするが、実際は半封建的部族社会であるアフガニスタンがソ連を先頭とする社会主義世界体制と結びつくことにより資本主義の発展段階を通過することなく社会主義に到達することをめざす民族民主主義革命を奉じる政党である。農民に土地水利権を付与する改革や労働者運動、諸民族・部族の統一をはかる祖国統一戦線などの大衆運動を基礎に政権を構想していたが、それらは願望かイリュージョンに過ぎなかった。そこを旧来地主や宗教勢力、部族氏族勢力、外国勢力などにつかれ、また、創立以来解党時までついに解消できなかったふたつの党内分派、つまりハルク(人民)派とパルチャム(旗)派の内部的な不団結もあり、78年の政権獲得、79年末のソ連軍介入にもかかわらず

崩壊への道をたどった。1990年6月、実態はそのままに人民民主党の名前を捨てて祖国党へと名称変更。

(5) ムジャヒディン: ムジャヒディンとは、「アラビア語で「ジハードを遂行する者」を意味するムジャーヒド(مجاهد mujahid)の複数形。一般的には、イスラム教の大義にのっとったジハードに参加する戦士たちのことを指す」(Wikipedia)。アフガニスタンではマスードが所属したアフガニスタンイスラム協会(ブルハースッディーン・ラッバーニー代表)、グルブッディーン・ヘクマティヤールが率いるアフガニスタンイスラム党など主要な7派が存在する。パキスタン領内のペシャワールに拠点を置き、パキスタン、サウジアラビア、アメリカなどから資金、人、武器などの支援を受けてソ連軍およびPDPA政権と戦った。このように外国からの直接的支援をうけて反ソ連・反政府活動を行うムジャヒディンをアフガニスタンでは「タンジム」と呼んでいる。本書ではまた、マスード自身が、タンジムとは一線を画することを文書で保証した事実が明らかにされている。1992年にナジブラ政権から権力を移譲された後ムジャヒディン陣営は内部分裂し、アフガニスタンをソ連駐留時よりも激しい内戦状態に陥れ、タリバン登場の条件をつくることとなる。

(6) タリバン政権: ムハンマド・オマルを最高指導者とする、パキスタンに支援されたイスラム原理主義集団による政権。アルカイダの指導者ビンラーディンを匿い続けたことにより2001年、アメリカの攻撃を呼び寄せ、圧倒的な武力により崩壊させられる。その後10年の間に態勢を立て直しアメリカ軍を中軸とする現在の外国軍とカルザイ政権に対する反対行動を強化している。タリバンの成立、実態については『タリバン』(アハメド・ラシッド:2000年、講談社)が詳しい。

(7) Googleなどの検索サイトやFacebookなどで「Afghanistan」とか、「Najibullah」などと打ち込むと80年代の主役(の継承者)たちの動向が垣間見られる。

(8) アグレマン: 外交用語のひとつで、特命全権大使(フランス語:Ambassadeur Extraordinaire et Plénipotentiaire、英語:Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary)として派遣されて来た人物を相手国の正式な代表として認知、承諾すること。日本に着任した外国の大使は天皇が接受しアグレマンを渡す。ムータット氏はこのアグレマンを受けた正式の特命全権大使であったためアフガニスタン本国の方針により帰国できなかったわけである。

(9) 元々外交官ではなくクーデタで王政を打倒した青年将

校のリーダーであり、78年4月革命の直前までダウド政権により自宅軟禁されていたムータット氏が日本大使として派遣されてきた経緯も興味深い。ハルク派とパルチャム派の連合を外部から促しダウド政権打倒を武力で支援した青年将校リーダーがPDPAには疎ましく、論功行賞の形をとってムータット氏を駐日大使として国外へ送り出したのであろう。大使の肩書きで対立者を国外に出す、また、進んで国外に一時避難するのは当時のアフガニスタンの政治的慣習であった。本書中にも自分の政策を批判するムータット氏を疎ましく感じるナジブラ大統領が大使として国外に出たらどうだ、とムータット氏に迫るシーンがでてくる。

(10) カルマル政権：1979年12月27日～1986年5月4日。ソ連の軍事介入により成立したバブラク・カルマルPDPAおよび革命評議会議長を大統領とする政権。ソ連の軍事介入の正統性をめぐり世界の批判の的にさらされ、国内的には反政府ゲリラの攻撃を集中されつづけることになる。カルマル政権成立後8カ月のアフガニスタンの状況、国づくりの状況などについては拙著『新生アフガニスタンへの旅』（1981年、群出版）が詳しい。古本が出た時にはAmazon.co.jpで購入可能。また<http://www.caravan.net/int/shinaf/index.html> で全文を読むことができる。

(11) 野口がアフガン取材から帰り、『新生アフガニスタンへの旅』を出版した1981年以降、アフガニスタン訪問者が中心になって組織された「アフガニスタンを知る会」、「日本アフガニスタン友好協会」、日本アフガニスタン合作映画『よみがえれカレーズ』の制作などを、ムータット氏は駐日大使あるいは副首相・副大統領として強力に支援された。

(12) ナジブラ政権：1986年5月4日～1992年4月16日。カルマル政権の後を継いだムハンマド・ナジブラを大統領とする政権。ナジブラは1977年にPDPA 中央委員。その風貌からブル(野牛)と渾名される。1980年秘密警察と恐れられていた国家保安省(KHAD)長官となる。1992年4月16日に大統領を辞任したことになるが、その3日前の4月13日、国外逃亡に失敗してカーブルの国連事務所に逃げ込んだ事実が本書で明かされた。その後タリバンがカーブルを制圧する1996年9月26日まで国連事務所で保護されていたが翌日の27日、逃亡途中をタリバンに発見され実弟ともども虐殺される。

(13) アーマド・シャー・マスード：本編の主人公のひとり。パンジシール溪谷を拠点にソ連軍・アフガニスタン軍にゲリラ闘争を挑みソ連軍を撤退に追い込む。アフガニスタン反ソ・反政府闘争の英雄。タジク人。PDPA 政権崩壊後、新政権内

で国防相を担当しアフガニスタン再建に尽力したが2001年の9・11事件直前、タリバンとアルカイダが仕組んだ自爆テロにより暗殺される。マスード司令官の活動、思想については長倉洋海の一連のレポートや写真集により詳しく伝えられている。『マスード—愛しの大地アフガン』(2001年:河出書房新社)、『マスードの戦い』(2001年:河出文庫)、『アフガニスタン敗れざる魂—マスードが命を賭けた国』(2002年:新潮社)など。